

挨拶

○宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター長） 私は北海道大学スラブ研究センターの宇山と申します。今日は国立大学附置研究所・センター長会議第3部会の公開シンポジウムです。いかめしい名前の組織ですけれども、要は全国の国立大学にある研究所・センターのうち、人文・社会科学系の14の研究所・センターが構成するのが第3部会ということになります。

このシンポジウムは、これら研究所・センターがどういう活動をしているのかをお互いによく分かり合うことと、その他の大学関係者、あるいは学外の市民の皆様には活動の様子を知っていただくということが趣旨となっています。

昨年は仙台で東北大学東北アジア研究センターが開催校となりました。どちらかというところと理系の研究者の方々を報告者として、文系と理系の連携のあり方を話し合うという大変刺激的な内容のものでした²。今年度は、私たち北海道大学スラブ研究センターが開催校となりまして、文系の研究の意味、意義をあらためて見つめ直そう、なおかつ、この第3部会の研究所・センターには地域研究、外国研究を専門とする、あるいは専門の一部とするところが多いものですから、地域研究をテーマとしてみようと考えました。

地域研究をやっていると、時に1つの国や地域に深く入り込んで、ほかの地域が見えにくくなる場合があります。そこで、むしろ自分のそれまで知らなかった地域について勉強することにどういう意味があり、それによってどういう発見があるのかということで、比較研究をテーマとすることにしました。これは私自身が中央アジアを専門とすると同時に、西アジアや南アジア、東アジアの特に近現代史を勉強する機会を近年多くいただきまして、比較をすることの楽しさ、わくわく感を、ぜひお伝えしたいと考えたのが企画の動機です。

これが今回のシンポジウムとは何なのかについての説明ですけれども、具体的な研究のお話に入っていく前に北海道大学を代表して、研究担当理事でいらっしゃる川端和重先生からごあいさつをお願いいたします。

○川端和重（北海道大学理事・副学長） 北海道大学の理事・副学長をやっております川端です。今日は国立大学附置研究所・センター長会議第3部会のシンポジウムということで、遠路お集まりいただきまして本当にどうもありがとうございます。開催校を代表して、少しごあいさつをさせていただきます。

現在、日本の中での研究では、オールジャパン体制ということが大きい声で叫ばれておりまして、1つの大学の中で閉じないで、非常に優秀な人を全国からえりすぐって、オリンピックチームを作れ、などという話が進められております。

そういう中で附置研究所・センターはどうあるべきかという話をするのが一般的なので

¹ ウェブサイト<<http://www.shochou-kaigi.org>>参照。

² 佐藤源之・高倉浩樹編『連携する研究所：国立大学附置研究所・センター長会議第3部会（人文・社会科学系）シンポジウム報告（東北アジア研究センター報告7号）』東北大学東北アジア研究センター、2013年。

<<http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/bitstream/10097/56314/1/Toh-Asi-Ken-2013-7.pdf>>

しょうが、実はこの「比較研究の愉しみ」という題を見た段階で、何かそういう話をするのがつまらないなと思い始めました。実は、大学の運営という意味では、副学長とかセンター長というのは、基本的に「花より団子」で言えば団子の方の話を日々やっておりますが、それは何のためにやるかという、団子のために団子をやっているわけではなくて、花を咲かせるために団子をやっているということになります。

そういう意味で言うと、この「比較研究の愉しみ」というキーワードで私の考えは何もかも破壊されてしましまして、少なくともこのシンポジウムに関しては、団子の話ではなくて花の話として、愉しみということを皆さんで共有化されて、思いっきり楽しんでいただければ、私たちとしては非常に幸せであると思っている次第です。

このシンポジウムはそういうことですが、今日はおかげさまで、ともかく北海道らしい天気の良い日になっております。夜になってもすすきは十分遅くまでやらせておりますので、皆様一緒にそちらの方にも足を運んでいただいて、ゆっくり楽しんでいただければ、私としては非常にありがたいと思います。

私のバックグラウンドは、実は物理学なもので、比較研究などというものはさっぱり分からない世界なのですが、このキーワードを見ている限りにおいて、ぜひ聞いてみたいという気が先ほどからしております。途中少し時間がだめな部分もありますけれども、時間が許す限り私もここに参加して、皆様のお邪魔にならない程度に座って見ていたいと思っております。何があいさつかよく分かりませんが、主催校を代表しましてあいさつに代えさせていただきます。どうもありがとうございます。

○宇山智彦 川端先生、大変楽しいあいさつをどうもありがとうございました。それではシンポジウムの中身の方に入っていきます。